

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る



Vol. 8

2018.10

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

縄文特集

contents

01 第8回 キーパーソンに聞く

北海道環境生活部 文化局文化振興課
縄文世界遺産推進室 特別研究員 阿部 千春 氏

05 特集

縄文で「地域創生」
世界文化遺産登録を目指す、
「北海道・北東北の縄文遺跡群」

11 地域が動く・プロジェクト最前線

- 11 ① 湧別町
漁師が恋した小さな牡蠣
- 13 ② 東神楽町
人口が増え続けているまち
- 15 ③ 美唄市
びばいで楽しむサイクルツーリズム

17 地域を創る人

地域で御活躍されているみなさんを
全道14振興局ごとに紹介するコーナー

- 17 釧路編 服部 佐知子 氏
酪農と鶴居村の魅力を発信し続ける
酪農家の応援団に！
- 18 渡島編 大宮 トシ子 氏
縄文の魅力を伝えたい
北の縄文文化で地域を元気に

国宝「中空土偶」

(提供：函館市教育委員会)



キーパーソンに聞く

縄文文化から明日の北海道を創造する

北海道環境生活部 文化局文化振興課
縄文世界遺産推進室 特別研究員

(元 函館市縄文文化交流センター館長)

平成30年7月19日、国の文化審議会世界文化遺産部会において、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が本年度の世界文化遺産の推薦候補として選定されました。今回は、専門的な立場で世界文化遺産の登録に向けて取り組んでいる、道縄文世界遺産推進室の阿部千春特別研究員にお話を伺いました。

阿部 千春氏

■ 縄文文化の始まり

— 初めに、縄文文化の概略について、教えてください。

過去100万年前の地球の歴史を見ると、10万年を周期として8万年の氷期と2万年の間氷期を繰り返していたことが分かっています。

約1万5千年前には、地球の急速な温暖化の進行により氷河期が終焉を迎えるとともに、石器を主な道具としていた旧石器時代は終わりを告げ、縄文時代が始まりました。この時代の文化を縄文文化と呼び、日本列島で本格的な稲作が始まる約2300年前の弥生時代開始までの間、約1万年続きました。縄文文化は、非常に長い期間続きましたが、それは停滞でも未発達でもなく、優れた技術や豊かな精神世界を持ち、成熟した社会であったためと考えられます。言い換えれば、狩猟採集文化が極限まで発達した時代とも言えるでしょう。

縄文時代の移り変わり

年代	時代区分	主な出来事	世界の出来事	縄文遺跡群
今から 約15,000年前	旧石器時代	・細石器文化が日本列島に広がる	・北京原人が活躍する ・ラスコー洞窟の壁画が描かれる	
約11,000年前	縄文時代 (時期区分)	章創期 ・土器や石鏃の使用が始まり、定住化が進み、ムラが出現する		・大平山元遺跡
約7,000年前		早期 ・気候の温暖化が進み、海水面が上昇する(縄文海進) ・貝塚が出現する	・長江下流域で稲作が始まる	・垣ノ島遺跡
約5,000年前		前期 ・円筒土器文化の成立 ・集落の数が増え、地域を代表するような拠点集落が現れる ・漆の利用技術の発達	・中国文明の始まり ・メソポタミア文明の始まり	・北黄金貝塚 ・三内丸山遺跡 ・田小屋野貝塚 ・ニツ森貝塚
約4,000年前		中期 ・大規模な拠点集落が発達する ・ヒスイや黒曜石等の交易が盛んとなる	・クフ王のピラミッド建設 ・インダス文明の始まり	・大船遺跡 ・御所野遺跡
約3,000年前		後期 ・中期にみられた大規模な拠点集落は減少し、集落の拡散化、分散化が進む ・環状列石が出現する	・ハンムラビ法典ができる ・殷王朝の成立 ・ツタンカーメン王即位	・キウス周堤墓群 ・入江貝塚 ・小牧野遺跡 ・大湯環状列石 ・伊勢堂岱遺跡
約2,300年前		晩期 ・亀ヶ岡文化が栄える ・遮光器土偶や土面など祭祀の道具が多く作られ、装身具類も多様となる ・北部九州に稲作が伝来する	・春秋時代	・大森勝山遺跡 ・亀ヶ岡石器時代遺跡 ・高砂貝塚 ・是川石器時代遺跡
	弥生時代	・吉野ヶ里遺跡が栄える	・秦の中国統一 ・コロッセウム建設	

※ 縄文遺跡群のうち、青字が北海道に存在する遺跡

■ 縄文文化の特徴と価値

実は、日本列島全体に広がっている縄文文化は均一ではなく、複数の地域文化圏が形成されていたことが分かっています。これは、主な食料資源が移動性の動物から、漁労や狩猟・採集など、集落周辺の固定資源に変わったことで、その地域の自然環境に合った文化が形成されたためと考えられています。日本列島は細長く南北に延びているので地域によって食料となる動・植物層が違います。

この時代に共通する一番の特徴は「自然と共生しながら、1万年も大きな戦争をせずに定住生活を実現したこと」でしょう。世界の先史文化を見ると、定住生活は自然を開拓して農耕や牧畜を開始し、食料の大量生産や貯蓄ができるようになってから始まります。そして都市文明へ発展し、領地の争いなどにより興亡を繰り返しています。



ところが、日本列島に渡った人々は、列島の生物多様性に富んだ環境を巧みに利用し、定住生活を実現したわけです。しかも、自給自足の生活だけをしていたのではなく、ヒスイや漆製品など遠隔地との交易も活発でした。その価値としては、長期にわたる自然との共生の中で形成された精神性であると感じています。例えば、「生きとし生けるもの全てを尊重する心」です。自然の中で生きることにより、

「人間は自然界の一員である」という考え方が縄文社会の中に根付いたのだと思います。このことを端的に示している物証として貝塚と盛土遺構（もりどいこう）があります。貝塚は食べ終えた貝の殻や魚の骨、あるいは動物の骨が堆積した場所で、盛土遺構は土器や石器など使い終わった道具類が大量に堆積した場所です。一見すると「燃えるゴミ」と「燃えない

阿部 千春（あべ ちはる）氏 略歴

1959年赤平市生まれ。立正大学文学部史学科（考古学）卒。公益財団法人北海道埋蔵文化財センター勤務の後、南茅部町教育委員会埋蔵文化財室長、函館市教育委員会文化財課参事（埋文担当）兼函館市縄文文化交流センター館長を経て2015年から現職。

い「ゴミ」を分別しているようにも見えます。しかし、ただ捨てているのではなく、火を焚いて土をかけるなど儀式のような痕跡もあり、実は両者ともに人も一緒に埋葬されているのです。ですから単なる「ゴミ捨て場ではなく、役割を終えたモノの魂を送る場所と考えられるようになりました。縄文時代の人々は、人間はもちろんのこと、動物や植物、そして物にも命があると考えていたのでしょうか。発掘調査を通してこのことを知り、私の縄文観は大きく変わりました。

こうした命を大切に思う心は、縄文時代を通して行われた「土偶づくり」にもつながっているのだと思います。土偶は潜在的に母性を持った女性像として作られます。命を生むのは女性だからです。縄文時代の人々は、子孫繁栄など、命の再生や循環を願っていたのでしよう。

— 現代の社会は環境保護など様々な問題を抱えています、縄文文化から学べることはありますか？

貝塚や盛土遺構の事例でいうと、食料とした生物や使用した道具に宿った魂を送るという精神的な儀式の中で、火を焚いて土をかけるという行為によって、衛生面でも集落を守るといった効果があったのだと思います。集落を長期間存続させるためには、



▲ 復元された北黄金貝塚(伊達市)



▲ 大船遺跡の盛土遺構(函館市)

「食糧の確保」「食糧の加工・貯蔵」「廃棄処理」という3つのシステムが整っていないかもしれません。これは、現代社会でも同じことです。特に先史時代においては、廃棄処理が整っていないと、虫や病気が発生するなど、集落に人が住めなくなる要因となつたと考えられるため、廃棄は深刻な問題だったはず。

それを解決する方法として、生活の中に精神的な儀式を取り入れたのでしよう。先人の知恵ですね。また、盛



▶公開中の大船遺跡(函館市)

土遺構からシカノ角で作った縫針が出土することがあります。現在でも日本には「針供養」という儀式がありますが、こうした器物供養の風習は海外ではあまり例を見ません。私たちの心の中にも共通する精神性が宿っているのでしょうか。

こうした自然観や命に対する考え方や、縄文文化の価値観は現代社会にも重要なメッセージを含んでいると感じています。国際社会の中で自然環境の保護が求められている今こそ、縄文文化の精神性が大切だと思っています。

— 北海道では縄文遺跡群の世界文化遺産登録に向けた取組が進められています。取組により期待される効果はどのようなものですか？

この度、北海道と青森、岩手、秋田の4道県による「北海道・北東北の縄文遺跡群」は国内推薦候補に選ばれました。縄文文化は日本列島全体に広がっていますが、その中でも「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産として訴えている価値は「気候変動に適應した1万年に及ぶ狩猟採集民の生活のあり方」であり、同一の自然環境の範囲かつ縄文文化の開始から終わりまでが切れ目なく辿れる物証という観点で道南と北東北の遺跡が選ばれました。

縄文時代は6つ程度の地域文化圏が形成されていたのですが、道南と北東北では津軽海峡を挟みながら冷温帯落葉広葉樹林という森林層のもと、1万年以上にわたって同じ文化圏が存続したのです。

このことが文化審議会でも認められ来年度の推薦候補となったわけですが、今後は自然遺産との競合や専門機関の調査への対応など、登録までに乗り越えなければならぬ課題は数多くあります。

しかし、来年度の推薦候補に選ばれたことは北海道としても大きな前進です。世界遺産登録の意義は、貴重な文化遺産を守り後世に引き継ぐことはもとより、その他にも期待できる効果と

して大きく3点あると考えています。

1点目は、「命ある全てのものを尊重する心」など、縄文文化が持つ価値観を国内外に発信することによって、より良い社会の形成を目指すこと。2点目は、自分たちが暮らす地域に世界遺産に登録される文化があったことを知ることによって、郷土を誇りに思い愛する心を醸成すること。3点目は、文化資源を核とした観光振興など、地域の活性化に波及することです。

これらの効果をバランス良く追求していくことが大切なことだと感じています。

— 観光振興の面では、具体的にどのような効果が考えられますか？

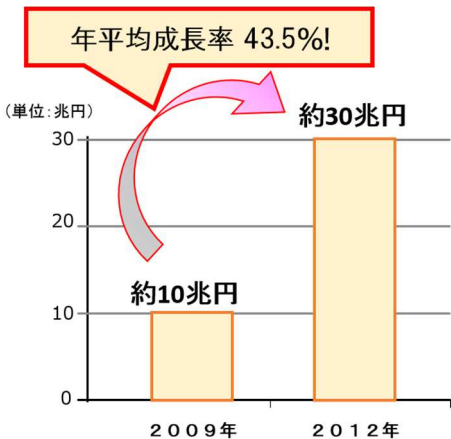
新しい観光のあり方が期待できると思っています。世界の観光動向を見ると「アドベンチャーツーリズム(以下、AT)」といわれる観光形態のニーズがここ数年で急伸しています。

ATとは「アクティビティ・異文化体験・自然」のうち、2つ以上の要素を含んでいる旅行のことで、平成29年の経済産業省北海道経済産業局の資料によると、ATの市場は欧米を中心に約30兆円(2630億ドル)の規模があるとされており、しかも、ATでは何らかの活動に参加するため、通常旅行者の2倍の消費額があるという統計もあります。世界全体のインバウンド市場は約136兆円(1兆2600億

ドル)で、欧米圏からの出発数が60%

強を占めています。その中でATの需要は35%もあるので、北海道にとっても大きな市場です。なぜなら、世界遺産に登録されると来訪者の急増はもちろんです。特に欧米圏からのインバウンドの増加が見込めると考えられるからです。海外から見ると、縄文文化はまさに異文化ですし、遺跡周囲には縄文文化を育んだ自然があり、各遺跡では縄文土器づくりや石器づくりなど、様々な縄文体験講座を実施していますから、ATにピッタリの素材といえます。

こうした観光形態が広まる中で、縄文文化の価値を伝えることができるでしょうし、道民自身も北海道の魅力やポテンシャルを再認識できるのではないのでしょうか。



欧米のアドベンチャーツーリズム(AT)市場

(経済産業省北海道経済産業局資料より)

— 世界文化遺産登録に向けて、今後取り進むべき点などはありませんか？

世界遺産に推薦する縄文遺跡は東北と合わせて17遺跡ありますが、道内では道南の6遺跡だけが構成資産になっています。これは、先に述べたように縄文時代の地域文化圏を範囲とするためですが、世界遺産の効果は全道的に広める必要があります、そのためには、道民が北海道の歴史とその魅力を知ることが鍵になると思っています。

日本列島では稲作が広まるとともに約2300年前に縄文時代から弥生時代に移行し、その後は古墳時代、飛鳥・奈良を経て平安時代と続きます。しかし、北海道では農耕に頼らず、縄文文化、オホーツク文化、擦文(さつもん)文化、アイヌ文化と変遷するなどが展開しました。意外と知られていませんが、これこそが世界に通じる北海道の魅力です。

特に道東地域には、オホーツク文化やアイヌ文化の貴重な遺跡群が保存されています。また、アイヌ文化については2020年に白老町の民族共生象徴空間がオープンします。こうした縄文文化からアイヌ文化に続く北海道固有の歴史・文化を面的・時間的につなげることによって魅力を高め、旅を通して北海道の真の大切さに気づくような観光を創造することができると思います。

— 最後に、北海道における縄文文化の魅力と今後の可能性についてお聞かせください

北海道には厳しくも豊かな自然があり、縄文文化からアイヌ文化に続く自然との共生の歴史があります。その時間のなかで培われた「生きとし生けるもの全てを尊重する」という精神は、人間は自然の一員であり、謙虚に自然に向き合うことの大切さを教えてくれる哲学でもあると感じています。

いまユネスコ(国際連合教育科学文化機関)では「持続可能な開発のための教育」(ESD)を展開し、その担い手を育成しています。

国際社会の中には環境、貧困、人権、平和、開発といった問題があります。それらを自分のこととして捉え、自分ができる身近なことから取り組むことで問題解決に至る新たな価値観や行動を生み出すことがESDの目的です。その実践プログラムとして、環境学習、生物多様性、世界遺産や地域の文化財等に関する学習などがありますが、縄文文化の普及・啓発はそのプログラムとして最適だと考えています。

こうした国や道が推進する文化施策の活用と各地域に存在する文化資源の連携により、北海道全体を歴史・文化・自然・食を核としたエコ・ミュージアムのような価値創造空間に発展させることができるのではないのでしょうか。

ESDのモットーは「今日よりいいアース(地球)への学び」です。この理念を北海道から世界に発信することも意義があることで、そうした一人一人の意識と行動が、明日の北海道を創造することにつながるのではないのでしょうか。



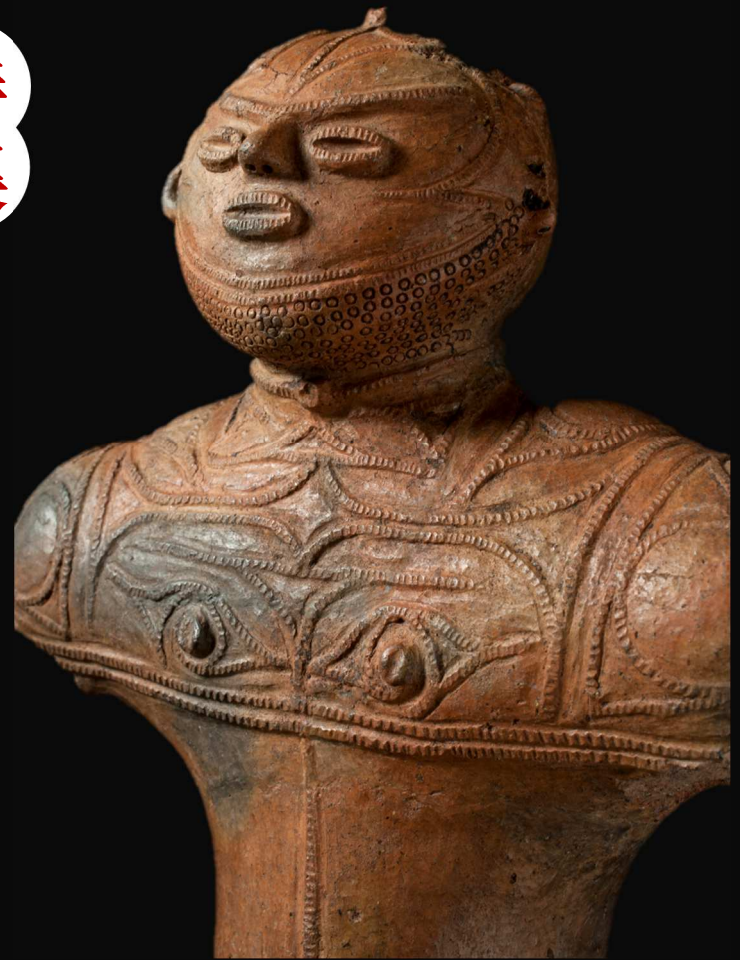
カックウ
◀ 国宝「中空土偶」(愛称：茅空)

昭和50年、旧南茅部町(現函館市)の畑で農作業中の主婦により発見される。高さ41.5cmと中空土偶の中では国内最大であり、部分的に黒漆や赤漆で装飾された跡が残っている。平成19年、北海道初の国宝に指定された。
ちよほないの
(縄文時代後期後半/著保内野遺跡出土)



▶ 漆塗り注口土器

高さ12cmほどの注ぎ口をもつ土器。黒漆の上に、赤漆を塗っており、現在の漆工芸と同様の高い技術が見られる。
(縄文時代後期後半/垣ノ島遺跡出土)



国宝「中空土偶」
(提供：函館市教育委員会)

特集

「縄文」で地域創生

世界文化遺産登録を目指す、

「北海道・北東北の縄文遺跡群」

平成30年7月19日、国の文化審議会世界文化遺産部会において、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が本年度の世界文化遺産の推薦候補として選定されました。今回の特集では、その構成資産や関連資産について取り上げるとともに、「縄文」をキーワードに活動を行っている団体を紹介いたします。

世界遺産とは？

世界遺産とは、現代に生きる人々が過去から引き継ぎ、未来へと伝えていかなければならない人類共通の遺産のことをいいます。

昭和47年、ユネスコ※総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」は、文化遺産や自然遺産を人類全体のための世界遺産として定義することで、損傷や破壊等の脅威から保護し、保存していくために、国際的な協力及び援助の体制を確立することを目的に締結されました。

平成30年9月末現在、世界遺産は1092件（文化遺産845件、自然遺産209件、複合遺産38件）が存在します。そのうち日本には22件の世界遺産があり、北海道では平成17年7月に知床が世界自然遺産として登録されています。

※ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）：諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的に昭和21年に設立された国際連合の専門機関。

【世界遺産の種類】

【文化遺産】

顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観など

(提供：姫路市)



▲ 姫路城(兵庫県)

【自然遺産】

顕著な普遍的価値を有する地形や地質、生態系、絶滅のおそれのある動植物の生息、生育地など



▲ 知床(北海道)

【複合遺産】

文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えているもの

(提供：平松 克博)



▲ マチュ・ピチュ(ペルー)



▲「北海道・北東北縄文遺跡群」構成資産等の位置図

北海道、青森県、岩手県及び秋田県の4道県で世界文化遺産の登録を目指している「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、平成19年8月に開かれた第11回北海道・北東北知事サミットにおける「世界遺産暫定一覽表登録に係る共同提案」の4道県合意に基づき、同年12月に文化庁に対し共同提案書を提出し、平成21年1月、文化庁において世界遺産暫定一覽表に記載されました。

世界遺産登録に向けて

その後、平成25年から「北海道・北東北の縄文遺跡群」の推薦書協議案を文化庁へ提出し、文化審議会の審議を経て、本年7月19日、文化審議会世界文化遺産部会において、平成30年度の世界文化遺産推薦候補として選定されました。

今後、世界遺産として登録されるためには、国からユネスコへ推薦される必要があるため、その後の専門機関の調査・勧告を経て、ユネスコ世界遺産委員会で審議・登録される流れとなります。審議が順調に進んだ場合、通常、国から推薦された翌々年に世界遺産として登録されることから、平成30年度に推薦された場合には、オリンピック・イヤーである2020年の夏に世界遺産として登録される見込みとなります。



▲垣ノ島遺跡の発掘状況(提供:函館市教育委員会)

その中で、「北海道・北東北の縄文遺跡群」に登録されている北海道内の遺跡を次のページで紹介いたします。

このうち、北海道内の遺跡は、6つの構成資産と1つの関連資産から成り、大型の竪穴住居跡が確認できる遺跡や異形土器等が出土した遺跡などが存在します。

「北海道・北東北の縄文遺跡群とは」

世界遺産の登録を目指している「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、津軽海峡を挟んだ4道県13市町にある17遺跡で構成されており、縄文時代の各時期(草創期、早期、前期、中期、後期、晩期)における集落跡や貝塚、環状列石などの遺跡群です。

